

日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(6)

北 條 礼 子*
(平成10年10月30日受理)

要 旨

本研究の目的は、日本人 EFL 学習者が外国語(英語)を学習するときに用いている学習方略とその関連諸要因の関係を明らかにすることである。そのため、1996年7月に高校3年生328名を対象に、Ellisにより提唱されている、学習方略とその関連諸要因のモデルを参考に、学習方略と学習方略に関連する諸要因の関係を検討した。ここでいう関連諸要因とは、英語学習の知覚的学習スタイル好性、性格特性(低外向性、冒険心、自尊心、権威主義、動機づけ)、英語の到達度である。その結果、学習方略と以上の諸要因は複雑に影響し合っていることが明らかになった。

KEY WORDS

学習方略	learning strategy	動機づけ	motivation
性格特性	personality	英語科教育	English education
知覚的学習スタイル好性	perceptual learning style preference		
語学教育	language education		

1. 研究の背景

これまで学習方略とその関連諸要因に関する多くのモデルが提唱されているが、Ellis(1996)のモデルでは、学習者の個人差、状況要因、学習方略、学習成果を取上げられている。彼のモデルは以下の図1に示すとおりである。このモデルによると、まず学習者の個人差と状況的/社会的要因が学習方略の選択に影響を与えている。ここでいう学習者の個人差は信念、情意的状態、学習者要因、学習経験であるが、さらに以下のように下位分類されている。

- 1) 信念：公式練習重視/機能的練習重視、学習重視/使用重視など
- 2) 情意的状態：不安
- 3) 学習者要因：年齢、適性、学習スタイル、動機づけ、性格
- 4) 学習経験：専門性、学習年数、進歩の程度、言語学習経験の有無など

次に、状況的/社会的要因には、対象言語、環境、実行課題、性差が含まれている。ここで対象言語とは、学習中の言語が公的なものか、公的なものでないのかということであり、環境とは ESL か EFL かという学習環境であり、課題とは学習者が取り組んでいる特定の課題のことである。また、このモデルでは学習方略は、中間的存在として捉えられている。さらに、

* 言語系教育講座

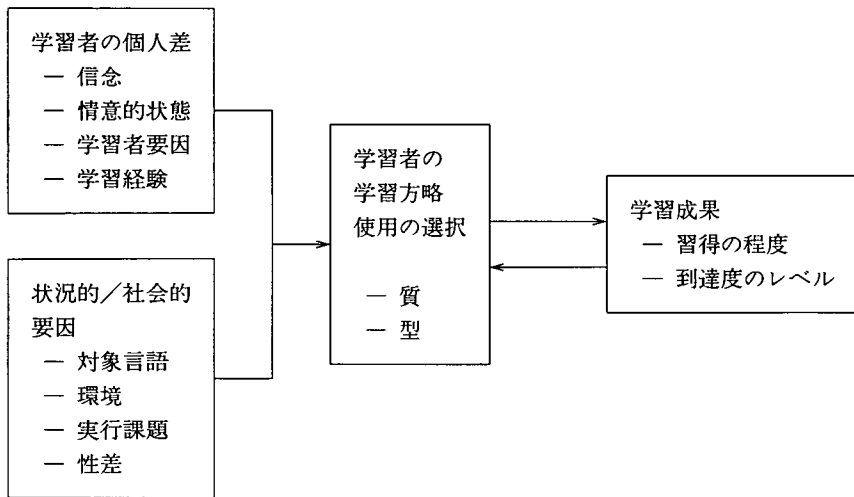


図1：Ellis (1996) の学習者の個人差，状況的/社会的要因，学習方略，学習成果の関係モデル

学習方略の選択は学習成果の2つの側面である，習得の程度や到達度のレベルに影響を与え，またL2の熟達度のレベルが学習方略の選択に影響を与えるものと説明されている。

ところで，この数年筆者は，日本人EFL学習者が英語学習において用いている学習方略とそれをめぐる諸要因について継続的に研究を行ってきた。その結果，まず日本人EFL高校生が英語学習において用いている学習方略としてこれまで「コミュニケーション志向」，「英文中心計画的英語接触努力」，「単語中心暗記学習」の3因子が抽出された(北條，1998)。その中の第I因子である「コミュニケーション志向」因子は日本人学習者に特徴的な傾向であると考えられる。また第II因子の「英文中心計画的英語接触努力」はいわば英文を中心としたものであり，第III因子の「単語中心暗記学習」は単語を中心としたものであると考えられ，少なくとも高校生のレベルでは，英文を中心とした学習と英単語を中心とした学習という，学習において注目する対象が異なっていることがわかった。

次に，学習方略をめぐる諸要因であるが，いわば英語学習の好みの型である知覚的学習スタイル好性については「視聴覚・ゲーム型」，「体験型」，「聴覚型」の3因子が抽出された。さらに性格特性については，かねてよりBrown (1994) が指摘しているように，その分類が必ずしも明確であるとは言い難いが，「冒険心」，「低外向性」，「自尊心」，「権威主義」の4因子が抽出された。また，動機づけについては，従来の代表的な分類である「統合的動機づけ」，「道具的動機づけ」のほかに，「プライドの充足」，「成績向上意識」という2因子が加わった形で，計4因子が抽出された。

以上の様に学習方略とその関連諸要因が抽出されたが，これらの要因は図1に示したEllisのモデルに含まれている。また，2校の研究協力校からリーディングとライティングの中間試験結果が得られたので，これを到達度として扱い，以上の要因の関連をみることにした。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、日本人 EFL 学習者の学習方略を予測するとされている要因(知覚的学習スタイル好性、動機づけ、性格特性)と学習方略との関係を明らかにすることである。次に本研究の第二の目的は、学習方略と互いに影響し合うといわれている、英語の到達度と学習方略との関係を明らかにすることである。最後に本研究の第三の目的は、Ellis のモデルを基に、以上の要因の関係を図式化することである。

3. 研究の方法

3.1 対象者： 茨城県立高校3年生 151名、新潟県立高校3年生 177名、計328名
(男子171名、女子157名)

3.2 測定具： 初めに対象者の性別、海外経験、現在の英語学習状況などを問い、その後、5段階尺度形式の41項目が続く形式のアンケート。この41項目のうち、以下の①、③、④の31項目は、著者の先行研究(1997a, 1997b)の結果を基に選択したものである。②は Ohmura (1996) が開発した10項目を、Ohmura の許可を得た上で用いた。

アンケートの構成は、以下のとおりである。

- ①知覚的学習スタイル好性に関する6項目
- ②性格特性(冒険心、自尊心、権威、外向性)に関する10項目
- ③動機づけに関する8項目
- ④学習方略に関する17項目

なお、英語の到達度を示すものとして、研究協力校2校それぞれから中間試験のリーディング、ライティングの得点を得た。

3.3 調査実施時期： 1996年7月

3.4 手続き： アンケートは記名式で、実施時間は約20分であった。回答形式は上記の①、②、③については「1.まったくそう思わない、2.どちらかというとそう思わない、3.どちらでもない、4.どちらかというと思う、5.まったくそう思う」の5段階であり、④については「1.まったくそうしない、2.めったにそうしない、3.どちらでもない、4.ときどきそうする、5.いつもそうする」の5段階である。アンケート回収後、1～5点までの得点化を行って項目ごとに集計した。

3.5 分析方法： 因子分析、回帰分析

4 結 果

4.1 学習方略と知覚的学習スタイル好性、性格特性、動機づけの関係(回帰分析)

学習方略3因子(標準因子得点)を目的変数とし、知覚的学習スタイル好性3因子(標準因

子得点), 性格特性 4 因子 (標準因子得点), 動機づけ 4 因子 (標準因子得点) を予測変数としたフォワード・セレクション方式のステップワイズ回帰分析を行った。その結果, 有意水準 5% で, 表 1 ~ 表 3 に示すように学習方略の 3 因子それぞれについて以下の因子を選出した。まず表 1 をみると, 「コミュニケーション志向」という学習方略の第 I 因子は, 視聴覚・ゲーム型と体験型の英語学習の好みの型, 道具的, 統合的, プライドの充足という動機づけ, 性格特性のうちの冒険心に喚起されることが示唆された。

次に, 表 2 をみると, 「英語接触努力」という学習方略の第 II 因子は, 視聴覚・ゲーム型, 体験型の知覚的学習スタイル好性, 統合的, 成績向上意識, プライドの充足という動機づけ, 性格特性の自尊心, 低外向性, 冒険心, 権威主義により喚起されることが示唆された。

さらに, 表 3 をみると, 「単語中心暗記学習」という学習方略の第 III 因子は, 成績向上意識, 道具的, 統合的動機づけ, 性格特性の冒険心, 低外向性, 体験型という知覚的学習スタイル好性により喚起されることが示唆された。

表 1 : 学習方略第 I 因子「コミュニケーション志向」を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測変数	R ²	累積	回帰係数	F
1	知覚的学習スタイル因子 I「視聴覚・ゲーム型」	.1164	.1164	.21	42.94**
2	知覚的学習スタイル因子 II「体験型」	.0402	.1566	.11	15.51**
3	動機づけ因子 III「道具的動機づけ」	.0333	.1899	.18	13.32**
4	動機づけ因子 I「統合的動機づけ」	.0279	.2178	.18	11.52**
5	動機づけ因子 II「プライドの充足」	.0150	.2328	.11	6.29*
6	性格特性因子 I「冒険心」	.0148	.2476	.11	6.30*

* p<.05 ** p<.01

(注) 以下の因子は選択されなかった (カッコ内 R²)。
性格特性因子 II「低外向性」(.0054)

表 2 : 学習方略第 II 因子「英文中心計画的英語接触努力」を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測変数	R ²	累積	回帰係数	F
1	知覚的学習スタイル因子 I「視聴覚・ゲーム型」	.1908	.1908	0.23	76.86**
2	性格特性因子 II「低外向性」	.0473	.2381	-0.14	20.20**
3	知覚的学習スタイル因子 II「体験型」	.0396	.2777	0.11	17.76**
4	動機づけ因子 I「統合的動機づけ」	.0184	.2961	0.15	8.43**
5	動機づけ因子 IV「成績向上意識」	.0125	.3086	-0.09	5.81*
6	性格特性因子 III「自尊心」	.0145	.3230	-0.03	6.86**
7	性格特性因子 I「冒険心」	.0121	.3351	0.09	5.83*
8	動機づけ因子 II「プライドの充足」	.0102	.3453	0.08	4.97*
9	性格特性因子 IV「権威主義」	.0086	.3540	-0.09	4.25*

* p<.05 ** p<.01

(注) 以下の因子は選択されなかった (カッコ内 R²)。
動機づけ因子 III「道具的動機づけ」(.0033)
知覚的学習スタイル好性因子 III「聴覚型」(.0014)

表 3：学習方略第III因子「単語中心暗記学習」を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測変数	R ²	累積	回帰係数	F
1	動機づけ因子IV「成績向上意識」	.0343	.0343	0.14	11.59**
2	動機づけ因子III「道具的動機づけ」	.0240	.0583	0.10	8.28**
3	性格特性因子I「冒険心」	.0199	.0783	0.07	7.01**
4	動機づけ因子I「統合的動機づけ」	.0146	.0929	0.08	5.21*

* p<.05 ** p<.01

(注) 以下の因子は選択されなかった (カッコ内 R²)。

性格特性因子II「低外向性」(.0058)

知覚的学習スタイル好性因子II「体験型」(.0061)

知覚的学習スタイル好性因子I「視聴覚・ゲーム型」(.0029)

性格特性因子IV「権威主義」(.0029)

性格特性因子III「自尊心」(.0025)

4.2 学習方略と英語の成績との関係

①英語の成績の平均値・標準偏差

学習方略が予測する対象となる項目として、次に、中間試験のリーディングとライティングの成績(100点満点)が調査協力校両校から得られた。表4は英語の中間試験の得点の平均と標準偏差を示したものである。

②回帰分析

調査を実施した両校から、中間試験のリーディングとライティングの得点を得たが、試験の内容が異なっているので、平均0、標準偏差1とし得点を標準化した。

その上でまず英語の中間試験のリーディングとライティングの得点を目的変数とし、学習方略3因子(標準因子得点)を予測変数としたフォワード・セレクション方式のステップワイズ回帰分析を行った。その結果、有意水準5%で、表5～表7に示すように情意的反応の3因子それぞれについて以下の因子を選出した。

表5をみると、英語の中間試験のリーディング得点を目的変数とした回帰分析の結果は、

表4：英語の中間試験得点(リーディング, ライティング)の平均と標準偏差(N=328)

項目	高校1			高校2		
	Mean	SD	N	Mean	SD	N
中間試験リーディング得点	64.18	16.49	151	65.20	16.16	177
中間試験ライティング得点	36.57	15.52	151	66.62	18.69	177

表5：英語の中間試験のリーディング得点を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測変数	R ²	累積	回帰係数	F
1	学習方略因子I「コミュニケーション志向」	.1127	.1127	.33	41.39**
2	学習方略因子III「単語中心暗記学習」	.0407	.1534	.24	15.64**
3	学習方略因子II「英語接触努力」	.0110	.1644	.14	4.26*

* p<.05 ** p<.01

コミュニケーション志向, 単語中心暗記学習, 英文中心計画的英語接触努力という学習方略により喚起されることが示唆された。

次に, 表6をみると, 英語の中間試験のライティングの得点は, コミュニケーション志向, 単語中心暗記学習という学習方略により喚起されることが示唆された。

さて, 学習方略3因子(標準因子得点)を目的変数とし, 英語の中間試験のリーディングとライティングの得点を予測変数としたフォワード・セレクション方式のステップワイズ回帰分析を行った。その結果, 有意水準5%で, 表7~表9に示すように, 学習方略3因子それぞれについて, 以下の因子を選出した。

まず, 表7をみると, 「コミュニケーション志向」という学習方略は中間試験のライティングとリーディングの得点に関連していることが示唆された。

次に, 表8をみると, 「英文中心計画的英語接触努力」という学習方略は中間試験のリーディ

表6: 英語の中間試験のライティング得点を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測変数	R ²	累積	回帰係数	F
1	学習方略因子I「コミュニケーション志向」	.1148	.1148	.33	42.29**
3	学習方略因子III「単語中心暗記学習」	.0386	.1534	.23	14.82**

** p < .01

(注) 以下の因子は選択されなかった(カッコ内R²)。

学習方略因子II「英文中心計画的英語接触努力」(.0097)

表7: 学習方略「コミュニケーション志向」を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測変数	R ²	累積	回帰係数	F
1	中間試験ライティング得点	.1148	.1148	.33	42.29**
2	中間試験リーディング得点	.0149	.1297	.23	5.56*

* p < .05 ** p < .01

表8: 学習方略「英文中心計画的英語接触努力」を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測変数	R ²	累積	回帰係数	F
1	中間試験リーディング得点	.0326	.0326	.09	11.00**

** p < .01

(注) 以下の因子は選択されなかった(カッコ内R²)。

中間試験ライティング得点(.0034)

表9: 学習方略「単語中心暗記学習」を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測変数	R ²	累積	回帰係数	F
1	中間試験リーディング得点	.0567	.0567	.11	19.60**

** p < .01

(注) 以下の因子は選択されなかった(カッコ内R²)。

中間試験ライティング得点(.0067)

ングの得点に関連していることが示唆された。

表9をみると、「単語中心暗記学習」という学習方略は中間試験のリーディングの得点に関連していることが示唆された。

5 考 察

5.1 学習方略と学習方略を予測する諸要因との関係について

これまで学習方略を予測すると指摘されてきた諸要因について、学習方略との関係を明らかにするため、回帰分析を実施した。ここでは知覚的学習スタイル好性、性格特性、動機づけが予測因子であり、学習方略が目的因子である。

その結果は、学習方略の第Ⅰ因子「コミュニケーション志向」を目的変数とした回帰分析の結果であるが、「視聴覚・ゲーム型」、「体験型」、「道具的動機づけ」、「統合的動機づけ」、「プライドの充足」、「冒険心」と関連していることが示唆された。この6因子の累積説明率は24.76%であった。言い換えると、視聴覚教材やゲームを通して英語学習をしたり、体を動かして行う英語学習が好きで、英語が自分の将来に何かしら役に立つと考え、英語を通して広く英語を話す人たちとコミュニケーションがしたいと希望し、英語ができると自分のプライドが満たされると考え、さらに冒険心を備えた学習者が、この「コミュニケーション志向」学習方略をより頻繁に用いる傾向があることがうかがえた。この因子の内容と本来内容に近い、統合的動機づけが関わっていることは当然であると考えられるが、動機づけのうち「成績向上意識」は関連していなかった。このことから、統合的、道具的動機づけや、プライドも意識しながら、コミュニケーションをしてみたいという気持ち強いが、成績はこの気持ちとは別で、特に成績を気にしない高校生の姿が思い浮かぶ。成績はあまり気にせず、しかも冒険心のある学習者が、積極的にコミュニケーションを図ろうとするのは、納得のいく結果であろう。

また第Ⅱ因子の「英文中心計画的英語接触努力」という学習方略は、「視聴覚・ゲーム型」、「低外向性」、「体験型」、「統合的動機づけ」、「成績向上意識」、「自尊心」、「冒険心」、「プライドの充足」、「権威主義」の9因子が関連していることが示唆された。この9因子の累積説明率は35.40%であった。特に、この「英文中心計画的英語接触努力」という学習方略に対して、視聴覚教材やゲームを用いた英語学習への好みは単独で、説明率が19.08%を示していた。さらに、回帰係数の方向性を考慮に入れると、「英文中心計画的英語接触努力」という学習方略は、英語を話す人とコミュニケーションをしたいと願い、体験型の学習を好むが、成績が向上するかどうかはあまり意識はしないものの、プライドの充足にはこだわりがある学習者に用いられる傾向があることが示唆された。この因子には、英語で書かれた本を読むことへの関心や、英語で話しかけられる人を探して英語を話したいという項目が含まれていたが、成績をあまり気にせずに、英語に直接触れて英語を学習しようとする側面と関連しているのではないかと推測される。言い換えると、英語の成績が向上するようにと特に意識はしないが、楽しみながら、プライドも満たされ、時にはゲームの気分で英語に接触することが特徴といえるようである。視聴覚・ゲーム型という学習の好みの型が最も影響力が大きいことから、学習者は視覚的刺激を用い、楽しむ要素を加えながら英文を覚える努力をしていると考えられる。さらに、性格特性をみると、「自尊心」、「低外向性」、「冒険心」、「権威主義」と関連していることが示唆された。そのうち、回帰係数の方向性から、「英文中心計画的英語接触努力」という学習方略は、説明率

は4.73%であるがまず低外向性が負の方向を示し、同様に自尊心、権威主義も負の方向を示したが、冒険心は正の方向を示した。つまり性格特性をまとめると、外向性がある、自尊心は強くなく、冒険心はあるが、権威主義ではない学習者が用いる学習方略であることが示唆された。特に、英語を話す人を探してでも英語を話そうとする場合には、外向性と冒険心を備えながら、自尊心は高くなく権威主義ではないほうが、その行為に向くであろう。

最後に、第III因子の「単語中心暗記学習」という学習方略は、「成績向上意識」、「道具的動機づけ」、「冒険心」、「統合的動機づけ」と関連していることが示された。この4因子の累積説明率は9.29%であった。「単語中心暗記学習」という学習方略の使用は、成績向上意識が強く、かつ道具的、統合的動機づけも強く、かつ冒険心がある学習者に用いられる傾向があることが示された。このような単語の暗記を中心とするボトムアップ式の学習法は、単語テストが実施されるのが普通であったり、試験の成績が英語の成績に反映される国内の大部分の高校において、当然一般的に行われているものと推測されるので、成績向上意識が最も関連のある因子として選出されたのは、当然であるように思われる。

以上から、本研究で扱った諸要因は学習方略とそれぞれなんらかの関連があることが明らかになった。本研究の調査票のため選択した項目がほとんど情意的でないものであったことを考えると、これらの諸要因が学習方略に対してかなりの影響を及ぼしているものと思われる。これまで、いくつかの性格特性と英語の到達度に関する研究はあるが(Tsuchihira, 1993; Larsen-Freeman, 1991)、性格と学習方略との関連に言及したものは見受けられない。しかし、本研究では、性格特性のうち、学習方略によって方向性の違いがあったものの、冒険心、自尊心、低外向性、権威主義が何らかの学習方略に関連していたことは興味深い。さらに、冒険心のみが学習方略の3因子と関連していたことも、注目に値するであろう。次に、知覚的学習スタイルの好みであるが、この3因子と単語中心暗記学習が関連していなかったことや、聴覚型が3因子と関連していなかったことも特徴的であろう。このことは、日本人高校生が英語学習に積極的に取り組む際に、視聴覚教材やゲームの要素がある教材を好み、体験型の学習を好むが、聴覚のみの刺激は学習に結びつきにくいことがまず考えられる。また、ボトムアップ式の単語を中心とした暗記学習は、学習の好みのタイプとは別の次元で行われているのかもしれない。また、Oxford & Crookall (1989)をはじめ、動機づけが学習方略使用の最大の予測因子であるとの報告をしているが、本研究でも動機づけが学習方略と関連が深いことが示唆された。ここでは、動機づけの4因子について学習方略との関係を検討したが、4種類全部の動機づけの下位分類が、学習方略3因子と何かしら関連を示していたことは、先行研究の結果を支持するものであった。4種類の下位分類のうちでも、英単語暗記型というボトムアップ式の学習と成績向上意識が関連するのが納得できる結果である一方、英文中心であるが生の英語に触れようとする学習方略とは負の関連性を示したことが特徴的であろう。英語学習においてこれまで統合的、道具的動機づけが影響を与えているとの指摘がされてきたが、今回の調査では、さらに成績向上意識やプライドの満足という動機づけも学習方略使用と関連のあることが示された。

5.2 学習方略と英語の到達度との関係について

5.2.1 学習方略から英語の到達度への影響について

学習方略と関連が深く、学習方略が予測するといわれてきた要因に、英語の到達度がある。このうち英語の到達度は、ここでは英語の中間試験の得点として扱った。本研究では、調査実

施校両校より、それぞれ中間試験のリーディングとライティングの得点を得たが、試験が異なっているため、高校ごとに、平均0、標準偏差1として得点を標準化した上で、テストの得点2種類を目的変数とし、学習方略を予測変数として、回帰分析を行った。

その結果、まず中間試験のリーディングの得点に対して、学習方略の「コミュニケーション志向」、「単語中心暗記学習」の2因子が1%レベルで、「英文中心計画的英語接触努力」の1因子が5%レベルで関連していることが示された。

次に、中間試験のライティングの得点に対して、学習方略の「コミュニケーション志向」、「単語中心暗記学習」の2因子が1%レベルで関連していることが示唆された。

リーディング、ライティングのどちらの得点にも「コミュニケーション志向」、「単語中心暗記学習」が関連していたが、認知的な要素の強い2種類の試験に対して、「コミュニケーション志向」が、11.27%、11.48%という説明率を示した。コミュニケーション志向という学習方略が認知面が強調されているリーディング、ライティングの成績に、最も影響があったことは興味深い。英語学習に対する積極的姿勢の強さとも考えられる。また英単語の暗記中心という学習方略がリーディング・ライティングのどちらの得点に影響を与えていたことは、この学習方略が成績向上意識という動機づけとの関連があったことからもうなづけるものであろう。一方、学習方略の「英文中心計画的英語接触努力」がリーディングの得点のみに関連しライティングの得点に関連していなかった。この学習方略には英語で書かれた本を読むという内容が含まれていたことからリーディングの得点との関連も推測できるが、基本本文の暗記が必ずしもライティングの成績に結びついていないことも指摘できる。本研究の対象となった一般的な高校生ライティングのレベルを考えると、英文というより英単語の影響の方が強いかもしれない。いずれにせよ、リーディングについては学習方略の累積説明率が16.44%、ライティングに対する学習方略の累積説明率が15.34%と、関連はみられたものの、必ずしもその関連性は強いとはいえなかった。

5.2.2 英語の到達度から英語の到達度への影響について

学習方略と関連が深く、学習方略が予測するといわれてきた要因に、英語の到達度がある。Skehan (1991)のモデルによれば学習方略が予測する要因として英語の熟達度が指摘されたが、Ellisのモデルでは、学習方略と英語の到達度は互いに影響を与えあっている。本研究は、Ellisのモデルに拠っているので、英語の到達度から学習方略への影響をも検討してみた。本研究では調査実施校両校より得た、それぞれ中間試験のリーディングとライティングの得点を基に、試験が異なっているため、高校ごとに、平均0、標準偏差1として得点を標準化した上で、テストの得点2種類を予測変数とし、学習方略を目的変数として、回帰分析を行った。

その結果、学習方略の第I因子「コミュニケーション志向」は、ライティング、リーディングのそれぞれの得点と関連があることが示された。学習方略の第II因子の「英文中心計画的英語接触努力」と第III因子の「単語中心暗記学習」はリーディングの得点のみと有意に関連していた。ただし、リーディングの得点は学習方略の3因子に対する説明率が、第I因子から順番に、1.48%、3.26%、5.67%と低かった。これに比べて、「コミュニケーション志向」に対するライティング得点は11.48%であり、以上の説明率の中では最も高かった。

5.3 日本人 EFL 高校生学習方略とその関連諸要因の関係

図1で示した Ellis の提唱する「学習者の個人差、状況的/社会的要因、学習方略、学習成果の関係」モデルを参考にし、本研究で得られた結果を用いて、日本人 EFL 高校生が英語学習において用いる学習方略と学習方略をめぐる諸要因の関係を、図2のように示した。

図2をみると、学習方略と学習方略をめぐる諸要因は複雑に関係合っていることが見て取れる。

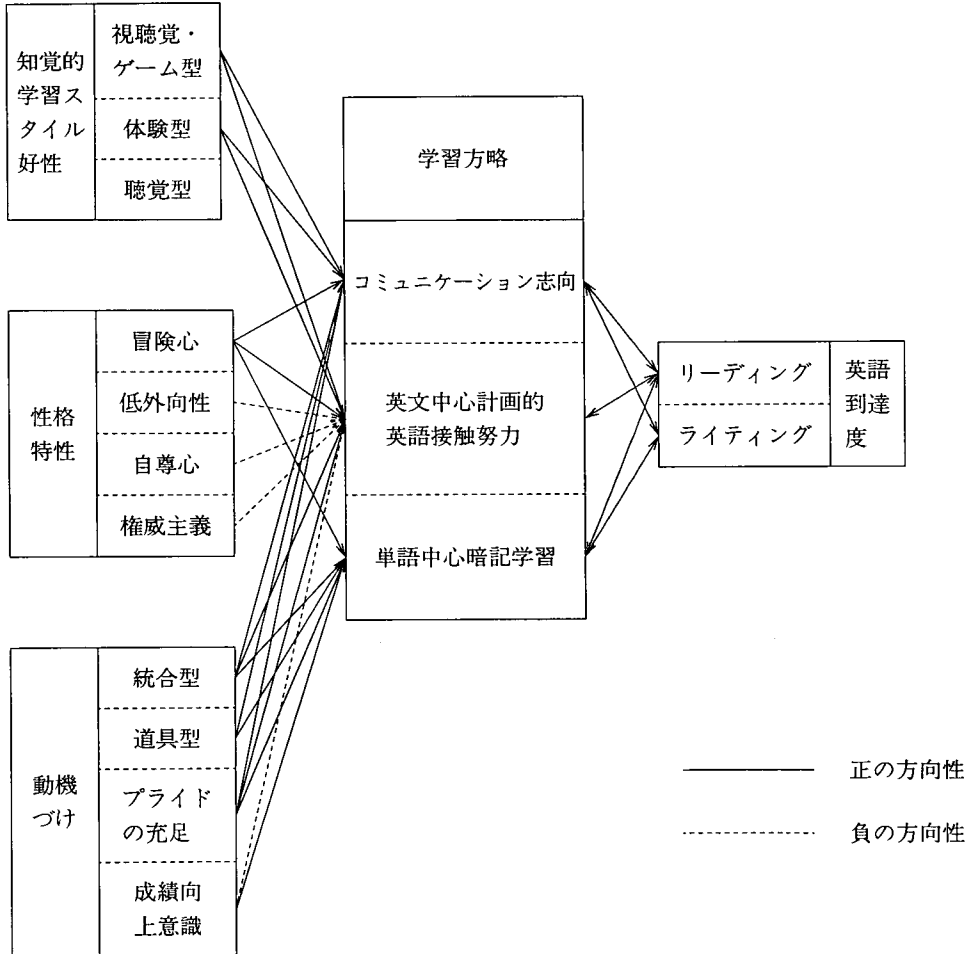


図2：日本人 EFL 学習者の個人差、学習方略、学習成果の関係

6 将来の課題

本研究では、Ellis の「個人差、状況的/社会的要因、学習方略、学習成果の関係」モデルの中に示されていた要因を部分的に扱い、研究の対象としなかった要因が多く残されている。た

たとえば、学習方略の予測要因として捉えられている要因の学習者の個人差の下位分類としての信念、情意的状態、学習者要因(年齢、適性)、学習経験や、状況的/社会的要因適性(言語、環境、実行課題、性差)である。また学習方略と影響を与え合っている要因としての学習成果の習得の程度もこれからの検討課題である。この中では、性差が学習方略の使用と関連が深いといわれていることから、特に検討が必要であろう。

今回の研究で扱ったのは、学習者要因の下位分類の中の、動機づけ、性格、学習スタイルであったが、年齢、言語適性についてはこれからの課題となる。まず、年齢という要因はさらに研究の対象範囲を拡大することが必須である。本研究は、学力的に平均的な日本人高校生を対象者とした。しかし、日本人 EFL 学習者全体の学習方略を明らかにするためには、さらに英語の到達度レベルの異なる高校生を対象とすることや、そればかりでなく調査の対象を、中学生、大学生に拡張することが重要であろう。またさらに中学校、高校、大学それぞれの学年ごとに学習方略使用が変化するのかどうかについても、より詳しく検討し、今回抽出された学習方略が日本人学習者全員に共通するものであるかを確認することも考えられる。その研究の過程で、学習方略が年齢と共に変化することが明らかになった場合には、新たに調査項目を改訂した上で、さらなる研究に備えることも必要となってくるであろう。

さらに今回の調査では、学習方略と互いに関連し合う英語の到達度として、リーディングとライティングの試験の得点を用いた。口頭でのいわゆる、オーラル・コミュニケーション能力を測定したデータが得られなかったため、このオーラル面での到達度との関係は検討できなかった。しかし本研究の結果から、第 I 因子として「コミュニケーション志向」が抽出されたことから、学習方略全体ばかりでなく特にこの因子がコミュニケーション能力とどの程度深く関連があるのかをみることも将来的な課題として重要であろう。

学習者が用いている学習方略について、教育する立場の教師が十分な知識を得ることは、教師にとって学習者個人々々の特徴を知る手助けとなることが期待される。特に、英語学習が思うように進まない学習者が、自分の用いている学習方略あるいは周囲の学習者が用いている学習方略に気づくことや、ときには英語の得意な学習者の用いている学習方略を示されることで、その後の自分の学習に対する意識が変わることも考えられる。また、学習者一人一人の学習方略の特徴を理解することが、補習学習が必要な学習者や、学習の困難点に関するガイダンスにおける資料となり、英語の学習面で何らかの効果があがることも期待できる。また、学習者が中学生、高校生である場合、進路を考慮する際の資料ともなり得るであろう。

参 考 文 献

- Brown, H.D. 1994 *Principles of Language Learning and Teaching* (3rd ed.) Prentice Hall Regents.
- Ellis, G. 1996 *The Study of Second Language Acquisition* (2nd ed.) Oxford University Press.
- 北條礼子. 1996. 「日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(1)」 上越教育大学研究紀要 16, 1, 185-196.
- _____. 1997a. 「日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(2)」 上越教育大学研究紀

- 要 16, 2, 583-596.
- _____. 1997b. 「日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(3)」 上越教育大学研究紀要 17, 1, 269-281.
- _____. 1998. 「日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(4)」 上越教育大学研究紀要 17, 2, 749-762.
- _____. 1998. 「日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(5)」 上越教育大学研究紀要 18, 1, 219-229.
- Larsen-Freeman, D. 1991. Second Language Acquisition Research: Staking Out the Territory. *TESOL Quarterly*, 25, 2, 315-350.
- Ohmura, K. 1996. A Study of the Correlations between Aptitude, Motivation, and Personality with Measured Achievement among Different Grade Levels of Japanese EFL Learners. Unpublished MA thesis presented to Joetsu University of Education.
- Oxford, R.L., & Crookall, D. 1989. Research on Language Learning Strategies: Methods, Findings, and Instructional Issues. *Modern Language Journal*, 73, 4, 404-419.
- _____. 1990b. *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*. Heinle & Heinle Publishers.
- Skehan, P. 1991. Individual Differences in Second-Language Learning. *Studies in Second Language Acquisition*, 13, 275-298.
- Tsuchihira, T. 1993. Motivation and Personalities in Introducing Communicative English Teaching in the Japanese Context. *Tsukuba Eigo Kyoiku*, 14, 233-250.

A Study of Learning Strategies Used by Japanese EFL Students (6)

Reiko HOJO*

The purpose of this study is to investigate how learning strategies used by Japanese EFL highschool students are interrelated with other variables, partially based on the second language acquisition model proposed by Ellis. The variables, such as their learning styles, particularly, perceptual ones, personality and motivation were examined.

Firstly, data on the factors mentioned above were gathered from three hundred twenty-eight highschool students in July of 1996, using a questionnaire consisting of forty-one items total. Secondly, the data were analyzed by factor analysis, extracting 3 factors for learning strategies, 3 for perceptual learning style preference, 4 for personality, and 4 for motivation. Lastly, regression analysis was performed with these factors, also including the subjects' English test scores of reading and writing as an index of achievement of English. The results revealed that learning strategies were interrelated among these factors in a complicated way.

* Division of Languages: Department of Foreign Languages